

## 湯治の歴史

### 健康を求める旅人たち

記録によると、湯治のために温泉に行く習慣は奈良時代（710-784）までさかのぼります。しかし、もともとは、温泉地に赴くお金と時間のあるのは貴族だけでした。この習慣が広まったのは、17世紀初頭、徳川幕府のもとで日本が統一された後のことでした。

皮肉なことに、江戸時代（1603-1867）になりようやく旅行が安全になると、ほとんどの旅行が禁止されました。数少ない例外に、宗教的な巡礼や湯治のための旅行がありました。健康上の理由で旅行する人は、経路上の関所で示す特別な許可証を取得しなければなりませんでした。富裕層は駕籠に乗って移動しましたが、一般庶民は布団や米、場合によっては身体の弱った高齢の親族を背負って徒歩で旅しました。江戸時代には、国内に数多くある温泉の様々な効能を伝えるガイドブックが出版されました。

時が経つにつれ、湯治を訪れる目的は治療から娯楽へと移行し、18世紀になると、日本の温泉街はヨーロッパの温泉街と同じように、社交の場所となりました。訪れた人々は大抵数週間滞在したため、他の客と知り合いになって友情を育みました。

明治時代（1868-1912）、日本社会は劇的な変化を遂げました。科学的な保健医療の導入に

伴う医療水準の向上に加え、生活様式の変化によって、長期滞在型の湯治は廃れていきました。

当然ながら、このことは温泉が健康増進の場所から観光の場所へと変化するのに拍車をかけました。

20世紀が進むにつれて、人々（特に「サラリーマン」）は団体で温泉を訪れるようになりました。巨大な鉄筋コンクリートの建物が質素で優美な木造の建物にとって代わり、古くからの湯治の伝統と文化はさらに衰退していきました。

しかし、昔ながらの文化が残っている場所がありました：日本の東北地方の奥まった地域です。東北は農業が盛んな地方で、地元の農家は農閑期になると家族で温泉地に長期滞在し、前年の疲れを癒して次の年に備えていました。

毎年同じ時期に同じ家族が同じ温泉を訪れるため、その雰囲気は和気あいあいとしていました。

人々は、食べ物（その土地で採れた山菜や自分の村から持参した特産品）を交換したり、みんなで民謡を歌ったり、帰路につくときには感傷的な別れの宴を開いたりしました。今日、酪農家を除くと日本には専業農家はほとんどいません。東北でも、食事付きの宿泊施設ではなく伝統的な自炊形式の長期滞在を選ぶ客は減っており、宿泊客全体のわずか1割以下となっています。